

ACNC NewsLetter

発行
特定非営利活動法人
あいち・子どもNPOセンター



〒460-0003 名古屋市中区錦3丁目2-32 錦アクシスビル2階
TEL&FAX:(052)253-6398
e-mail:aichi-kodomo@mountain.ocn.ne.jp
HP: <http://aichi-kodomo.sakura.ne.jp>

地域に子ども・保護者・支援者の居場所をデザインしよう 大村 恵（愛知教育大学）

あいち・子どもNPOセンター2025年度の事業として、名古屋市社会福祉協議会の地域の子ども応援事業「地域で子ども・子育てを支える人づくり事業」の助成を受けて、「児童館・子育て支援センターを子ども・保護者・支援者の居場所にデザインする講座」を開講しています。

この講座の目的は、2つあります。一つは、児童館、子育て支援センターなどの子ども・子育て支援の拠点を、子どもの居場所、保護者の居場所、支援者の居場所としてデザインすることです。子ども・子育て支援において居場所づくりが急務であることは多くの支援者に共有されています。日本財団「18歳意識調査」「子どもと家族について」(2020年)によれば家庭を居場所と感じない人が16.7%、どこにも居場所がない人が8.6%に達しています。

保護者も、社会的孤立は拡大しています。PIAZZA株式会社による「孤育てに関するアンケート」(2024)によれば子育て中に孤立や孤独を感じたことがある女性は74.2%、男性35.5%にのぼっています。子ども会やPTAなどの地縁組織に参加することに消極的であったり、組織自体がなくなってしまった地域が増えたりしています。

さらに、社会的孤立は大人たち全体の問題でもあります。内閣官房孤独・孤立対策担当室「人々のつながりに関する基礎調査」(2023)によれば新型コロナウイルス感染拡大が始まった2020年3月頃より前と比べて「人と直接会ってコミュニケーションをとること」が減ったという回答は44.7%です。子ども・子育て支援者自身も、働く仲間や子育て仲間と語り合う時間はどうか。

子どもだけでなく、保護者の居場所、支援者の居場所として児童館・子育て支援センターをデザインするこ

とを考えてみよう。それが、第一の目的です。

第二の目的は、子ども・子育て支援者の担い手が育ち合うことです。2000年代以降の子ども・子育て支援を牽引してきたNPO等団体は、次の世代の担い手に活動を継承する課題を広く共有しています。支援者自身の生活スタイル、活動のあり方の変化も視野にいれつつ、次世代の担い手のネットワークを形成し、学び合い、育ち合う支援者が育つことを支えようということが第二の目的になります。

講座の内容は以下のとおりです。講師のみなさんのお話は刺激的で、グループに分かれての語り合いはいつも時間が足りないくらいです。今年度の取り組みを踏まえて、次年度の活動に繋げていきたいと思います。



9/16「居場所作りを考える」

講師:大村恵(愛知教育大学)

伊藤美由紀(こども・コムステーション・いしかり)

10/21「児童館を子ども・保護者の居場所に」

講師:伊藤暁(緑児童館)

竹内由美(港児童館)

12/16「放課後児童クラブと地域の居場所」

講師:石原剛志(静岡大学)

竹内隆人(愛知学童保育連絡協議会)

1/20「子ども・子育て支援者の育ちと居場所作り」

講師:船橋理仁(名古屋大学大学院)

江口このみ(白金児童館)

「児童館・子育て支援センターを子ども・保護者・支援者の 居場所にデザインする講座」報告

9月16日（火）「居場所作りを考える」

大村 恵 （愛知教育大学）

伊藤美由紀（NPO法人こども・コムステーション・いしかり）

第1回講座は、大村さんによる、子ども・保護者・支援者の社会的孤立の問題、こども家庭庁の「こどもの居場所づくりに関する指針」について、子どもの権利からみた居場所などのお話の後、伊藤さんより、北海道石狩市のこども・コムステーション・いしかり（以下コムステ）の活動紹介をしていただきました。「コムステの事業は10代のベビーシッター養成講座や子育て支援拠点事業、放課後児童クラブなど多岐にわたっています。コムステが指定管理者として運営している「大型児童センターこども未来館あいポート（以下あいポート）」は0歳からおとなまでが集い、様々な形の居場所の複合体で、一人でコミックを読んで過ごす子、グループでボードゲームを楽しむ中学生の居場所、バンド練習で集まる高校生の居場所、幼児と父親が長時間過ごす居場所になっています。その中で行われている令和6年度NPO等と連携した子どもの居場所づくり支援モデル事業（こども家庭庁）の「FunFun マナビーバ」は、学校以外の学びの場所で、大学生と連携し、児童に寄り添い安心できる居場所を目指す事業です。過ごし方は「来る時間、帰る時間は自分で決め、自分でやりたい勉強をもってくること」であり、学習の伴走者は、小学生の頃から高校まであいポートに遊びに来ていた大学生。子どもたちにとって話しやすい立場であるからこそ、大学生スタッフは子どもたちへの影響力の大きさを自覚し、自分自身の言動に責任をもつことの大切さを理解していき、大学生の居場所にもなりました。また、一緒に空間にはいない保護者にとっても安心できる居場所になっています」と語られました。

【文責 岩根】



参加者の声

- 子ども・保護者が安心できる場所、認めもらえる、相手を認められる気持ちを持つ、地域の理解、地域と共に学ぶ、児童館は遊んで学ぶ場所であってほしい。
- 「母の手を握ることが支援者の仕事ではない、全員の手は握れない、母親同士が手をつなぐ手助けをする立場である」という言葉が心に残った。その意識を常に忘れず接していくことが大事と思った。
- 居場所のあり方の多様化で、様々な居場所となり得るところがあるにも関わらず、居場所がないと感じる18歳が多いことに驚いた。居場所が多いほど自己肯定感が高くなると教わったが、居場所がないということは自己肯定感が低い子どもが多いのか。いろいろな家族の姿を見てきて、考えさせられる場面が多いが、子どもが安心して育つことのできる環境が当たり前でないことに気づいた。
- 居場所作りを考える上で、居場所の果たす役割、大切さに改めて目を向けることができた。「居場所が多いほど自己肯定感が高まる」ということが特に印象に残った。それだけに、居場所がないと感じる子どもたちの割合の高さに驚くとともに居場所作りは急務であると感じた。
- 「居場所がある」ことが、「人格をつくる基盤となる」という言葉がとても印象的。そのような「居場所」作りを、自分の館の実情を出し合いながら、職員と共に考え、できることから実行していきたい。最後のまとめにあったように、「職員にとって居心地のよい職場」を作りながら「利用者にとっての居心地のよさ」につなげていけるような運営を目指したいと思う。

10月21日(火)「児童館を子ども・保護者の居場所に」

伊藤 暁(緑児童館) 竹内 由美(港児童館)

第2回講座は、講師による、児童館を子ども・保護者の居場所にしていくための実践例などのお話の後、グループワークとして、参加者自身の施設のあり方を振り返り、グループで共有しました。

グループワーク時に記入していただいた、緑児童館、港児童館への質問に対して、講師より返答をいただきましたので、その一部を紹介します。

Q.1「子どもたちの自由な行動」と「乳幼児の保護者の思い」の両立をどのようにしているか。

<緑児童館>

子どもたち(小学生、中学生、高校生)に対して、「自由」は「自分だけがよければそれでよいという自由」ではなく、「他者の自由との折り合い」をつけていくことという考えで働きかけている。当館では世代間交流の機会を確保するため、幼児親子専用スペースを設置していないが、「幼児室」の代わりに「幼児(優先)エリア」を設けている。

<港児童館>

幼児は基本的に乳幼児専用スペースの『ちびっこルーム』で過ごし、年齢による住み分けをしている。中学生以上になると自分からベビーシッターを希望する場合もあり、職員が安全管理に配慮しながら保護者の了解のもと一定時間一緒に遊べる時間・空間を設けることもある。

Q.2 移動児童館の実施場所として、どうしてその先を選んだのか、また、アウトリーチに対する考え方も知りたい。

<緑児童館>

当館単独の出張事業としては、2か所の移動児童館を実施している。1か所は集合住宅の一角にある小規模公園。福祉的な課題や多国籍の住民が暮らすエリアであり、遊び場の提供はもとより、地域組織との連携や定点的な見守り、相談援助や関係機関につなげる目的で実施。もう1か所は、自然環境の豊かな大規模公園で実施。雑木林や傾斜などフィールドがあり、活発に活動できる。

<港児童館>

基本的には児童館から距離が離れていて、児童館を利用するのが難しい場所を選んでいる。昨年度は、天候に左右されない室内型公共施設の1室を移動児童館としたが、公園の場合よりも利用者が激減した。屋外が心地よい季節が極端に短くなり外遊びに適さない時期が増え、アウトリーチもますます頭を悩ましてる。

Q.3 トラブルがあった時の対処や出禁やケンカはなど、ルールはどの程度決めているか。

<緑児童館>

ケースバイケースで考えている。「出禁」について、私から子どもに出禁を言い渡したことはない。逆に、トラブルがあり保護者の方から、「児童館に行くな」という場面があるが、そのような保護者に対して「今回の行為自体は良くないが、それを改め、児童館は引き続き利用し続けて欲しい」と伝えている。「ケンカ」については、両者の関係性や力関係などによって介入の方法も変わる。まずは状況を把握し、両者の主張に真摯に耳を傾け、お互いの主張を交通整理するなど、コミュニケーションのサポートをする。

<港児童館>

基本的なルールには、厳しい姿勢で臨んでいる。公共施設という性格上一般の利用者が不快になる行為はNG。子どもと一緒に決めるルールと職員主導型のルールと二通りある。暴力行為・いじめ、職員や他の子どもへの暴言、器物破損、窃盗、性的な言動などについては出禁にしている。喫煙を発見した場合、館内持ち込みが確認された場合はその場で退館を促す。器物破損、他者への暴力行為は、本人や場合によっては親も呼んで「なぜその行為に至ったのか？」丁寧にその問題と向き合う。

Q.4 いろいろな人の対応の仕方、職員間の同意をどのように作っていくのか。

<緑児童館>

日々のトラブルや提案などから職員間、あるいは子どもや利用者と話し合いを重ね、合意点を探りながら現在に至る。

<港児童館>

職員も入れ替わりがあり、子どもへの接遇に関しては、常に頭を悩ませている。職員会議を頻繁に開くことが勤務上困難なため、できるだけ児童館日誌や普段のコミュニケーションを大事にしてその穴を埋めている。ランチミーティングやミニ会議で、個人が感じる違和感をできるだけ早期に解決できるように努めている。

Q.5 変わっていくきっかけ作りはどのように行っていたのか。

<緑児童館>

当然、職員間でも考え方や手法が異なる場合がある。日々の相談、振り返りや定期的な職員会議の際に振り返り、対応検討などを重ねている。

<港児童館>

児童館は日進月歩。ニーズに合わせて変化し続けるもので、固定概念にとらわれず、縛られすぎないのも大切。



ユースワークと子どもの居場所

日時：2025年3月23日（日）10:30～12:00

場所：あいち・子どもNPOセンター

講師：両角 達平 さん（日本福祉大学社会福祉学部 講師）



両角さんは、ご自身の中高生時代よりユースワークの活動に参加され、大学時代は中高生の余暇活動を支援するYEC（若者エンパワメント委員会）活動に取り組まれています。その経験からユースワークに着目し、ヨーロッパ各地を訪問。特にスウェーデンの若者政策を研究してこられました。この講座では、スウェーデンのユースワークを中心に「現場に活かすユースワーク」という視点でお話いただきました。

ヨーロッパにおける若者政策とは、当該国における若年層の良好な生活状況や機会を保障する政府の公約であり実践である。スウェーデンの若者政策の考え方は、あらゆる人が「参画できる社会」の構築をめざす一つの柱であり、若者の生活保障・自立・社会への影響力の発揮が理念となる。若者政策とユースワークと若者の参画の関係は、根底に若者政策があり、実践の場が学校教育、福祉の場と並び、ユースワークは若者が参画し、半依存/半自立からの移行時期を支えていく領域を担っている。

“居場所+参画=ユースワーク” ユースワークは若者が自分の生活や人生に関するあらゆることを意思決定できるように支援し、権利を保障する活動。グループあるいは一人ひとりの若者のための若者と共に行う社会・文化教育、環境、政治などの様々な活動。

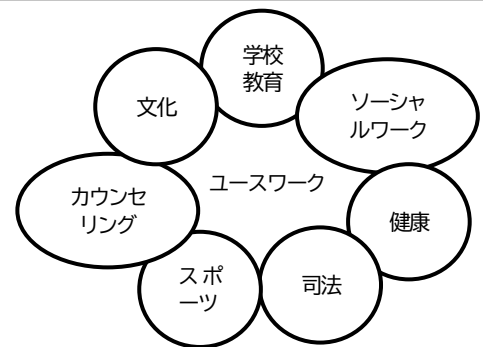
そして、ユースセンターは若者にとって大切な場所であり核となる施設。なぜなら、若者が家庭、学校以外で自らが選んでくる場所であるから。加えて、若者と向き合い信頼関係を築き、多分野と連携して若者の可能性を引き出すユースワーカーの役割が大切である。

【文責 岩根】

ユースワークとそうじゃないものとの違い

- ☐ あらゆる若者に開かれているか
- ☐ 若者の声を聴いているか
- ☐ 若者と取り組んでいるか
- ☐ 若者が選んで活動しているか
- ☐ 若者個人にも社会にとっても良いものか
- ☐ 若者にとって魅力的か

両角達平（2024年）何がユースワークで、何がユースワークではないか？
欧州の事例をヒントに、月刊社会教育/「月刊社会教育」編集委員会編



参加者の声

日本において所得・学歴よりも「自己決定」が幸福感に強い影響を与えているという実証研究があることを知り、若者の幸福感向上のためには、若者が自分らしく居心地よくいられる居場所と併せて、若者が自分の生活や人生に関するあらゆることを意思決定できるように支援し、権利を保障するユースワークが、とても重要であるということを理解しました。

若者・外国人未来応援事業スタッフ募集

「高校卒業程度認定試験（高認）」に向けた学習支援と、名古屋地域では外国にルーツをもつ方へ学習言語としての日本語支援をあわせて実施しています。

単に勉強を教えるだけではなく、どんな生活・キャリアをこれから目指していくのか、そのために今は何に取り組んでいけば良いか、一人一人の相談に寄り添った丁寧にコミュニケーションをとることを大事にしています。

【日時】 名古屋地域：水曜日 17:00～20:00 土曜日 14:30～17:30

一宮地域： 火曜日 17:00～20:00 土曜日 15:30～18:30 （時間は準備・片付けを含む）

【会場】 名古屋地域：愛知県図書館 5階研修室 一宮地域：一宮市立中央図書館 7階講座室

【連絡先】 あいち・子どもNPOセンターにメールでご連絡ください。

aichi-kodomo@mountain.ocn.ne.jp